━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━
■ IICLO MAGAZINE NO.173------------------------------- 2025/1/21
★★★ 大阪国際児童文学振興財団 メールマガジン ★★★
------------------------------------------------------------------
━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━
今年はじめてのメールマガジンをお届けします。寒さもそろそろピークを迎えますが、暖かい春が待ち遠しい今日この頃。今年も充実した記事が届けられるようスタッフ一同がんばります。
現在会員登録数 4,369 人さま。次号は 2 月 20 日発行の予定です／
┼━━━━━━━━━━ ◇◆◇ 目次 ◇◆◇ ━━━━━━━━━━━┼

【１】お知らせ
【２】コラム
《１》この本読んだ？
《２》イーハトヴ周遊　宮沢賢治の童話を読破する
《３》子どもの本の珠玉のことば
《４》行って来ました！
《５》宮川健郎　私の出会った児童文学者たち
【３】全国のイベント紹介
【４】プレゼント
┼━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━┼

■━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━■
【１】お知らせ
■━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━■
●人形劇を大阪府立中央図書館で上演します。
大阪国際児童文学振興財団所属のボランティア人形劇サークル「ぱれっと」が、人形劇「エパミナンダス」を上演します。
日　時：２月 24 日（月・祝） 14：00 から　※ 無料、申し込み不要
会　場：大阪府立中央図書館 多目的室
主　催：大阪府立中央図書館 こども資料室

●「日産 童話と絵本のグランプリ」表彰式・特別講演会
「第 41 回 日産 童話と絵本のグランプリ」表彰式で、本グランプリ審査員の吉橋通夫さんによる特別講演を開催します。
特別講演「物語を書くコツ」
日　時：３月８日（土） 13：20～15：30 ◇表彰式 ◇特別講演会（約 50 分）
会　場：大阪府立中央図書館 ライティホール
講　師：吉橋通夫（児童文学作家）
定　員：70 人（申込先着順）　対　象：中学生以上　参加費：無　料
主　催：大阪国際児童文学振興財団
協　賛：日産自動車株式会社
お申込み、詳細は ↓↓
http://www.iiclo.or.jp/07_com-con/02_nissan/index.html#41lecture

● ≪寄付プレゼントキャンペーン実施中です≫
当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。ぜひ、ご協力くださいますようお願いします。
２月末までのキャンペーン期間中、１万円以上ご寄付いただいた方に下記の中からおひとつプレゼントいたします。
◇プレゼント内容：

〈１〉富安陽子さんのサイン本　１冊（限定２５冊・抽選）
〈２〉イイクロちゃんグッズ 全種類セット
〈３〉当財団発行のお好きな報告集　１冊
※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html
※Syncable（シンカブル）＝継続寄付（毎年／毎月）、単発寄付が選べます。
→ https://syncable.biz/associate/19800701

● YouTube 版「本の海大冒険」　https://www.youtube.com/@iiclo1196
※公開内容一覧は → http://www.iiclo.or.jp/ml_youtube/index.html

● Instagram　https://www.instagram.com/iiclo_official/　随時更新

● Ｘ（旧 Twitter）https://twitter.com/IICLO_News　毎日更新

■――――――――――――――――――――――――――――――――――■
【２】コラム
■――――――――――――――――――――――――――――――――――■
**********
《１》この本読んだ？ Yasuko's & Takeo's Talk
**********
『ワルイコいねが』　安東みきえ/著　講談社　2024 年 11 月　対象年齢：小学校高学年以上

＊今回のゲストは当財団理事長の宮川健郎さん（Ｔ）です。

あらすじ：山梨に住む小学６年生の美海（みみ）は、幼いころ秋田のおばあちゃんの家でなまはげに出会ってから「ワルイコ」にはなりたくないと毎日を過ごし、友だちとも波風を立てないように気をつけてきた。そんなとき、隣のクラスに秋田からアキトという少女が転校してきて、同じ書道教室に通うようになる。幼馴染の小太郎は、アキトが「やばいやつ」と美海に忠告する。美海は言いたいことを率直に言うアキトに好感を持つが、アキトがお年寄りに冷たい態度を示したり、知らない人のお葬式に行こうとしたりするのを見て不思議に思う。

Ｔ：小学校６年生の主人公が自分らしい自分を手に入れるというような物語はこれまでにも繰り返し書かれ、読者にとっても身近なテーマだと思いますが、この作品にはそれに加えて独特の魅力があります。
　その一つは、転校生アキトの人物像です。記憶力が抜群によくて、お世辞や嘘を言ったり空気を読んだりすることがわからないアキトは、美海を驚かせます。昔の遊びを学ぶ行事で竹とんぼを作っているおじいさんの嘘も暴きます。おじいさんは「わしらみたいにほんとうの戦争に一度でも行ってみたらわかるんだ」と言ったとき、年齢的に「戦争に行った」のは嘘だと面と向かって言うのです。この場面は胸がすくような気持ちになりました。
Ｙ：アキトで言えば、私は、彼女が知らない人のお葬式に行ったり、お年寄りに失礼なことを言ったりするのはなぜかという謎解きの要素が読ませる力になっていると思いました。読者は美海とともにその謎について考え、アキトを理解しようとします。
Ｔ：もう一つの魅力は、作品の中で秋田の民俗や言葉が使われていることです。なまはげが作品で重要な意味を持つと同時に、美海とアキトが秋田弁で語り合うとき、二人に心の交流が生まれます。
Ｙ：なまはげが神であり鬼であったり、その由来が作品内で語られたり、ワル

イコとイイコの境界があいまいであったり、生と死の世界が描かれたり、なまはげは作品全体のテーマとつながっています。

Ｔ：そして何より、最後の情景の美しさに惹かれました。美海とアキトは、小太郎の祖父で書道の先生のお食事会に参加します。それは秋田料理の店で、途中でなまはげが現れるのですが、その夢か幻のような場面には作者固有の世界が描かれていると思いました。

Ｙ：私もこの場面大好きでした。

　他にも、美海と幼馴染の小太郎や、アキトのおじいちゃんや、美海のおばあちゃん、小太郎のおじいちゃんなど、脇役もいい味を出しています。そして大人たちが「この子は悪い子じゃないと、信じてくれる」ことで、子どもたちが成長していけるのだと思いました。

**********

《２》イーハトヴ周遊　宮沢賢治の童話を読破する

**********

第 113 回「若い木霊」

　鴾の火と木霊

丘のあちこちに、まだ消え残りの雪が残る早春。若い木霊が、明るい枯草の丘の間を歩いていました。〈ふん。日の光がぷるぷるやってやがる。いや、日の光だけでもないぞ。風だ。いや、風だけでもないな。（中略）おかしいな。おれの胸までどきどき云いやがる。ふん。〉

木霊は、小さな窪地で一匹の蟇（ひきがえる）に出会います。蟇の〈鴾（とき）の火だ。鴾の火だ。もう空だって碧くはないんだ。／桃色のペラペラの寒天でできているんだ。いい天気だ。／ぽかぽかするなあ。〉という言葉を聞いて、若い木霊の息は〈その底で火でも燃えているように熱くはあはあ〉します。

やがて、木霊は向うの丘の上で〈はねうらが桃色にひらめ〉く鴾に出会います。鴾の火を分けてもらうため、鴾を追って暗い木立の方へ向かいますが、そこに鴾の火は見当たりません。騙されたと知った木霊に〈まっ青な顔の大きな木霊が赤い瑪瑙のような眼玉をきょろきょろさせてだんだんこっちへやって〉きます。木霊は風のように逃げ、自分の木の方へかけ戻るところで物語は終わります。

他の木々がまだ眠るなか、早々に春の息吹を感じて野に出た若い木霊は、胸をどきどきと突き動かされ、熱い息を吐き出します。この激しい衝動を象徴するものとして、繰り返し登場するのが得体の知れない鴾の火です。伊藤眞一郎は、この鴾の火は〈自然界の春の訪れを表徴するものであり、と同時に、この若い主人公の内に目覚めた官能の象徴〉であり、〈「鴾の火」を求めて行った挙句に出遭う森というのは、思春期の官能に目覚めたばかりの若い木霊の前途に広がる、未知の世界、つまり、大人の世界、の象徴〉だと述べています。（「タネリはたしかにいちにち噛んでゐたやうだった」論、1977 年）

大人の世界かどうかはともかく、鴾の火を探して別の世界、異界を覗き見た木霊はそこから逃げ帰ります。その世界に足を踏み入れる資格も条件も、まだ木霊には備わっていなかったことになります。子どもと大人、冬と春、死と生など、さまざまな境界が考えられますが、物語にとって重要なのは鴾の火そのものではなく、鴾の火を内に抱えた木霊の激しい煩悶にこそあるのかもしれません。

なお、本作は改稿されて「タネリはたしかにいちにち噛んでいたやうだった」となり、そこで主人公は木の精から子どもへと大きく変わることになります。（ペ吉）

（本文の引用は、新潮文庫版『ポラーノの広場』によりました。）

**********
《３》子どもの本の珠玉のことば　６７
**********

　シモーンはずっと、ホームの人たちが、あたしたちがいくのをどんなに楽しみにしてるかを話してた。
　あたしは、バッカみたい、っていってやった。あの人たちが、あたしたちの歌をきくよりすきなテレビをみたいと思ってたって、シモーンにはわかんないじゃない。それにどっちみち、あたしたちが『サウンド・オブ・ミュージック』のしめっぽい歌をうたうのをきいたら、みんな、ゲロはいちゃうよ。

（『ペニーの日記読んじゃだめ』　ロビン・クライン/作　アン・ジェイムズ/絵　安藤紀子/訳　偕成社　1997 年 1 月　p.21-22）

ペニーは 10 歳。飼ってはいないけれど馬が大好きで、ママにピンクのワンピースを着せられても、ジーンズとトレーナーをこっそりかばんに入れて学校で着替えるような子どもです。学校でボランティア活動として老人ホームへ行って歌を歌ったり、リコーダーを吹いたりすると聞いて、ママに「年よりなんか気持ちわるいから、あんなとこ、いきたくない。」と言います。

老人ホームへ行く月曜日には引用のように、優等生タイプのシモーンがはりきっているのと対称的に、ペニーは自分にとっても老人たちにとっても意義がないと思います。そこで、みんなと舞台にあがってリコーダーを吹き始めたとき、こっそり、カーテンのかげにひっこみ、舞台から降りてお皿にのっていたチョコレートケーキをもって、庭へ逃げました。

すると、そこには、「やかましい音をたてている子どもたち」から逃れて庭にきているベタニーさんというおばあさんがいました。二人は意気投合して仲良くなり、ベタニーさんが以前住んでいた場所を訪ねたり、ペニーの家に招いて 81 歳の誕生日パーティーをしたりします。

その様子がペニーの日記としていきいきと描かれていています。反骨精神いっぱいのペニーとベタニーさんの会話はユーモラスで、ペニーがベタニーさんの孤独に気づく場面はそれだけに心に残ります。原書は 1983 年の作品です。機会があって読み直しましたが、今読んでも楽しい作品でした。（Ｙ）

**********
《４》　行って来ました！
**********
伊丹市昆虫館で２月 24 日まで開催されている企画展「盛口満原画展　ゲッチョ先生の宝箱」に行ってきました。ゲッチョ先生こと、日本の博物学者で沖縄大学教授かつ、フリーライターで、イラストレーターでもある盛口満の絵本原画 150 点以上、約 100 タイトルの著書、原画に関連する動植物の標本や写真、生きた昆虫などが、「ゲッチョってこんな人」、「ゲッチョの原画『昆虫』」、「ゲッチョの原画『動物』」、「ゲッチョの原画『キノコ』『粘菌』」、「教えてゲ

ッチョ『自然の描き方』」、「虫を描いてみよう！」、「ゲッチョも描いた生きもの『生態展示』」「ゲッチョの本大集合！」の９つのコーナーに分けて展示されていました。

原画には、著書に出てくることばが添えられていますが、それと同時に、描かれている虫が生きたまま展示されていたり、標本が並べられたりしています。ゲッチョ先生の細密な絵と、本物の標本を見比べることができて興味深く、さすが昆虫館だと思いました。

絵は、細い線で緻密に描かれていて、水彩で薄い色がつけられています。その絵のせいで、ふだんかわいいと思えない、ゴキブリや青虫なども気持ち悪いというよりきれいと感じました。これは、ゲッチョ先生のすべての生き物に対する愛と畏敬の念が表現されているからだと思いました。

ゲッチョ先生には『くらべた・しらべた野山のいろいろうんこ図鑑』（岩崎書店　2023 年 12 月）という著書もあり、タヌキの糞が観察された絵もありました。いろいろな種子の混ざった糞が描かれていて、こちらもきれいだなと思いました。この部分には、タヌキのはく製が展示されていると同時に、博物館がある昆陽池公園にカメラを設置して、タヌキが脱糞するところを撮影し、上映していました。その姿勢からは、タヌキも人間も同じだなと感じさせられました。

そうやって次々とゲッチョ先生の絵を見た出口付近のコーナーは、「虫を描いてみよう！」で、標本が置いてあり、それを見ながら絵を描くことができるようになっていました。たくさんの子どもたちが夢中で絵を描いており、私も描いてみたくなりました。

常設展示や約 1000 匹のチョウがいる「チョウ温室」を見て回り、昆陽池公園を散歩して帰りました。ぱっと見たらわからなくても、この公園にはゲッチョ先生の絵にでてきた生き物がいるんだろうなと命を感じながら歩きました。（Ｋ）

伊丹市昆虫館　https://www.itakon.com/

**********
《５》 宮川健郎　私の出会った児童文学者たち　第１７回
**********
第５章　古田足日先生
その２　「散文性のかく得」（中の前半）

昨年（2024 年）は、古田足日・田畑精一の絵本『おしいれのぼうけん』（童心社 1974 年）の刊行 50 周年でした。私が古田足日先生（1927～2014 年）に出会ったのは、『おしいれのぼうけん』が刊行された、つぎの年。私は 19 歳でした。

この連載では、「思い出話」を語るだけではなく、私の出会った児童文学作家や評論家の仕事に対する考察や、さらには、そこから、現代児童文学史のとらえ直しも試みます。ご愛読ください。

＜本編はこちらから＞
http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta.html

■――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――■
【３】全国のイベント紹介
■――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――■
●子どもと本の集い 2024　児童文学作家 富安陽子講演会
「物語が生まれるとき　－富安陽子のものがたり世界－」
日時：３月２日（日）　14：00～16：00　※無料、要申し込み
場所：吹田市立中央図書館 集会室
主催：吹田子どもの本連絡会

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓
http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html
※イベント情報をお送りください。当財団ＨＰに掲載させていただきます／

■――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――■
【４】プレゼント
■――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――■
今号のコラム《１》「この本読んだ？」で紹介しました『ワルイコいねが』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ ご応募ください。
応募フォーム⇒　https://forms.gle/uL2TpNhMEYWJpnQ9A
締切は２月 11 日（火）、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編｜集｜長｜の｜つ｜ぶ｜や｜き｜
└┘└┘└┘└┘└┘└┘└┘└┘
地元の出初式を見に行きました。消防団員に加え、幼年防火クラブの子どもたちもそろいの法被で溌剌と行進・整列しており、いざという時の地域のネットワークの大切が伝わってきます。希薄になりがちな近所付き合いの昨今だからこそ、大事にしたいと改めて感じました。本年もどうぞよろしくお願いいたします。（ＴＡ）
――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――
---
みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。
原則として返信はいたしませんのでご了承ください。
●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。
●配信の登録・解除・変更は、
　http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html
●このメールの送信アドレスは配信専用です。
●記事の無断転載はご遠慮ください。
---
発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 http://www.iiclo.or.jp/
〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内
TEL：06-6744-0581　FAX：06-6744-0582　E-mail：office@iiclo.or.jp
---
――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――